佐々木美智子著
『「産む性」と現代社会』
長谷川方子

著者は、二〇年以上にわたって「お産」についての民俗調査と研究を積み重ね、その中から導き出された「産む性」という概念によって、女性民俗を歴史的に位置づけることを本著によって世に問うている。それは、出産を巡る環境など多角的視点と考察によって、現代民俗学に新しい方向性を示すものでもある。

構成は、序章　「産む性」と現代社会／第一章　「産む性」と当事者環境／第二章　「産む性」と統制管理環境／第三章　「産む性」と生活環境／第四章　女性民俗研究のこれから／附論　近代化・民俗・ヒト／となっている。

著者が調査対象を現代の女性や家族に広げ、三世代の女性から聞き取りをするなど、時代による民俗の変化を探るという明確な意図のもとに、詳細な調査を行っていることは重要である。著者は伝統的社会から現代社会へと移行する過程の指標として「近代化」に着目し、前期・中期・後期の時代区分をして、民俗学の動向と重ねる見解も提示している。

本著では「産む性」としての女性が時代や社会による制約の中で、より良い出産を求め、女性同士の連帯によって一歩ずつ前進してきた歴史を明らかにしている。これを可能にしているのは産む側の声を聞き、引きだそうとする著者の姿勢に他ならない。著者は市井（著者の定義）の人びとの声を聞くという民俗学の方法は、現代の生活文化の解明にも重要な役割を果たすことができることを強調している。

産育儀礼について、地域の人びととの日常的な結びつきが希薄になり個人的な儀礼に変わっても、形を変えて現代も盛んに行われている事実を示し、家族との絆、安全な出産への願いや女性同士の連帯という普遍的な要素は変わらないことを、当事者である女性たちへの詳細な聞き取り調査によって明示する。

著者は統制管理環境としての出産をめぐる制度や近代産婆の役割変化の歴史、腹帯についての賛否の歴史などをわかりやすく説明することによって、出産環境という言葉を説得力あるものにしている。出産にかかわる医療技術の歴史を江戸時代の文献や現代医療現場の事情も含めて明らかにしている内容を読むと、近代化が進む現代でさえも、出産の方法や社会観念、環境がめまぐるしく変化していることに驚かされる。

男性助産師導入問題など社会的な問題については、著者自身が様々な活動に参加することによって、当事者の声を聞き、この問題の根深さを浮き彫りにしている。助産婦のライフヒストリーの中で、女性の心と身体を深く認識することによって、自然な分娩へ導く方法を聞き取っているが、女性の身体的感覚を共有できない男性の助産を、なぜ産む側の女性が不安な思いで反対をするのかという理由に納得させられる。

戦後になり女性が、産むか産まないかや自然分娩か無痛分娩か、あるいはラマーズ法のような出産方法などを主体的に選択できるようになることで、「産む性」としての女性自身もお産環境としてとらえられるという考え方も示されている。

著者自身の調査に基づく具体的な事実の提示によって、これまでの民俗学の成果を引き継ぎ、現代の民俗を研究するための道筋を示した功績は大きいと筆者は考えている。論理的に構成された本著は必ずや出産についての読者の考察に寄与するものであり、豊富な事例から発見できることも多く、出産について研究する学徒に必読の書である。

（岩田書院　二〇一六年発行　Ａ５版　四〇七頁）